河合町文化財調査報告書　第20集

2005・2006・2007年度
埋蔵文化財発掘調査報告書

池部三ツ池古墳群
フジ山遺跡
川合大西遺跡
長楽遺跡第5次
高山4号墳(高山塚4号古墳)
大輪田・城内遺跡

2008年3月

(奈良県北葛城郡)
河合町教育委員会

2005・2006・2007年度
埋蔵文化財発掘調査報告書

池部三ツ池古墳群
フジ山遺跡
川合大西遺跡
長楽遺跡第5次
高山4号墳(高山塚4号古墳)
大輪田・城内遺跡

序

河合町には大小さまざまな古墳や寺院、集落跡、瓦窯跡などたくさんの遺跡が残されています。

本書では平成17年度から平成19年度にかけての3ヵ年間に実施しました6件の調査成果を報告しています。

池部では新たに2基の古墳が見つかり、近くの長林寺の創建とも関わる人物の墓所ではないかと思われ、河合町の歴史に新たな資料が加わりました。

他の5件の調査も小規模なものばかりですが、それぞれに新知見となり、それぞれの地域の歴史を彩る資料を得ることができました。

本書が河合町の歴史を知り、町づくりの一助となることを期待しています。

最後になりましたが、発掘調査及び本書の作成にあたってご指導・ご協力賜りました関係機関・関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

河合町長　岡　井　康　徳

例　言

1．本書は2005（平成17）年度～2007（平成19）年度に河合町教育委員会が国庫補助金・県費補助金を受けて実施した池部三ツ池古墳群、フジ山遺跡、川合大西遺跡、長楽遺跡第５次、高山４号墳（高山塚４号古墳）、大輪田・城内遺跡の発掘調査報告書である。

2．池部三ツ池古墳群の現地調査期間は、平成18年3月13日～平成18年3月29日（第１次）、平成18年6月19日～平成18年8月22日（第２次）である。

フジ山遺跡の現地調査は平成18年5月30日に開始し、平成18年6月5日に終了した。

川合大西遺跡の現地調査は平成19年1月9日に開始し、平成19年1月11日に終了した。

長楽遺跡第５次の現地調査は平成19年3月6日に開始し、平成19年3月7日に終了した。

高山４号墳（高山塚４号古墳）の現地調査は平成19年7月5日に開始し、平成19年7月10日に終了した。

大輪田・城内遺跡の現地調査は平成19年7月5日に開始し、平成19年7月18日に終了した。

3．調査組織は次のとおりである。

調査主体　河合町教育委員会

調査担当者　河合町教育委員会事務局　生涯学習課　文化財保存係　吉村公男

調査補助員　小林美佐子、西村慈子

調査事務局　河合町教育委員会事務局　生涯学習課　文化財保存係

教育長・川邊興司　教育理事・藤岡和成　課長・木村光弘　課長補佐・梅野修治

係長・吉村公男　主事・藤岡正人・枚本光清（生涯学習係）　木村浩章（文化財保存係）

4．池部三ツ池古墳群の発掘作業は株式会社アートに委託した。

フジ山遺跡の発掘作業は安西工業株式会社に委託した。

川合大西遺跡の発掘作業は有限会社ワークに委託した。

長楽遺跡第５次の発掘作業は安西工業株式会社に委託した。

高山４号墳（高山塚４号古墳）の発掘作業は株式会社アートに委託した。

大輪田・城内遺跡の発掘作業は株式会社アートに委託した。

5．航空写真は株式会社アイシーに委託し、航空写真以外の写真は吉村が撮影した。

6．本書を作成するにあたり下記の諸機関並びに諸氏のご指導・ご協力をいただいた。ここに記して謝意を表する。

奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所、王寺町教育委員会、奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会、辰巳和弘、米山英、岩田英之、中嶋清一、吉村友男、吉村秀三、谷田佳明、井上皓司、井上薫、石田考志、松井米蔵、和田勝行、篠原俊明、森川人和、岡島永昌、櫻井恵、田中一廣

（敬称略、順不同）

7．図２は国土地理院発行の1：25,000地形図「信貴山」（平成13年7月1日発行）及び「大和高田」（平成14年4月1日発行）をもとに作成した。図3・10・13・18・22・26は河合町発行の１：2,500河合町全図1・3・4（平成16年3月　修正版）をもとに作成した。

8．土層の土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖22版』に拠った。

9．発掘調査により出土した遺物、図面及び写真等の記録類の全ては河合町教育委員会で保管している。

10．遺物の整理及び本書の作成は吉村、小林、西村が行った。

11．本書の執筆・編集は吉村が行った。

本文目次

1．2005・2006・2007年度の埋蔵文化財発掘調査について …… 1
2．池部三ツ池古墳群の調査
（1）はじめに …… 2
（2）遺構 …… 4
（3）遺物 …… 11
（4）まとめ …… 14

3．フジ山遺跡の調査
（1）はじめに …… 15
（2）遺構 …… 15
（3）遺物 …… 15
（4）まとめ …… 15

4．川合大西遺跡の調査
（1）はじめに …… 17
（2）遺構 …… 17
（3）遺物 …… 18
（4）まとめ …… 18

5．長楽遺跡第５次調査
（1）はじめに …… 19
（2）遺構 …… 19
（3）遺物 …… 20
（4）まとめ …… 20

6．高山４号墳（高山塚４号古墳）の調査
（1）はじめに …… 21
（2）遺構 …… 21
（3）遺物 …… 22
（4）まとめ …… 22

7．大輪田・城内遺跡の調査
（1）はじめに …… 23
（2）遺構 …… 23
（3）遺物 …… 25
（4）まとめ …… 25

挿図目次

図1　河合町の位置……1
図2　2005・2006・2007年度調査地位置図……1
図3　池部三ツ池古墳群調査地位置図……3
図4　池部三ツ池古墳群周辺地形図……4
図5　池部三ツ池古墳群第1トレンチ南壁土層断面図……4
図6　池部三ツ池古墳群調査地測量図……5～6
図7　池部三ツ池古墳群第2トレンチ・第3トレンチ平面図及び土層断面図……7～8
図8　池部三ツ池1号墳石室平面図・立面図及び断面図……9
図9　池部三ツ池古墳群出土遺物……13
図10　フジ山遺跡調査地位置図……15
図11　フジ山遺跡トレンチ配置図……15
図12　フジ山遺跡トレンチ平面図及び土層断面図……16
図13　川合大西遺跡調査地位置図……17
図14　川合大西遺跡トレンチ配置図……17
図15　川合大西遺跡第1トレンチ土層断面図……17
図16　川合大西遺跡第2トレンチ平面図・土層断面図……18
図17　川合大西遺跡出土遺物……18
図18　長楽遺跡調査地位置図……19
図19　長楽遺跡トレンチ配置図……19
図20　長楽遺跡トレンチ土層断面図……19
図21　長楽遺跡出土遺物……20
図22　高山4号墳調査地位置図……21
図23　高山4号墳墳丘測量図……21
図24　高山4号墳トレンチ平面図及び土層断面図……22
図25　高山4号墳出土・採集遺物……22
図26　大輪田・城内遺跡調査地位置図……23
図27　大輪田・城内遺跡トレンチ配置図……23
図28　大輪田・城内遺跡トレンチ平面図及び土層断面図……24
図29　大輪田・城内遺跡出土遺物……26

写真図版目次

写真図版1	池部三ツ池古墳群	1．航空写真(西から)　2．航空写真(南から)
写真図版2	池部三ツ池古墳群	1．1号墳航空写真(垂直)　2．2号墳航空写真(垂直)
写真図版3	池部三ツ池古墳群	1．1号墳と2号墳(西から)　2．1号墳石室(北から)
写真図版4	池部三ツ池古墳群	1．調査前(北東から)　2．調査前(南から)
		3．第1トレンチ掘削状況(北から)
写真図版5	池部三ツ池古墳群	1．第1トレンチ須恵器出土状況　2．1号墳検出状況(東から)
		3．1号墳石室検出状況(トレンチ拡張後・南から)
写真図版6	池部三ツ池古墳群	1．1号墳墓壙掘り下げ状況(南から)　2．1号墳石室内遺物出土状況(南から)
		3．1号墳石室内掘り下げ状況(南から)
写真図版7	池部三ツ池古墳群	1．1号墳石室(アゼ除去後・東から)　2．1号墳石室(アゼ除去後・北から)
		3．1号墳石室(石材除去後・北から)
写真図版8	池部三ツ池古墳群	1．1号墳石室床面断ち割り状況(南から)　2．2号墳検出状況(北東から)
		3．2号墳墓壙・周溝掘り下げ状況(北東から)
写真図版9	池部三ツ池古墳群	1．2号墳墓壙掘り下げ状況(西から)　2．2号墳墓壙掘り下げ状況(南から)
		3．2号墳墓壙掘り下げ・須恵器出土状況(拡張後・南から)
写真図版10	池部三ツ池古墳群	出土遺物1
写真図版11	池部三ツ池古墳群	出土遺物2
写真図版12	フジ山遺跡	1．調査地全景(北西から)　2．出土遺物　3．第1トレンチ
		4．第2トレンチ　5．第3トレンチ　6．第4トレンチ　7．第5トレンチ
		8．第6トレンチ　9．第7トレンチ　10．第8トレンチ　11．第9トレンチ
		12．第10トレンチ　13．第11トレンチ　14．第12トレンチ
写真図版13	川合大西遺跡	1．調査前(東から)　2．第1トレンチ(東から)
		3．第2トレンチ遺構検出状況(北から)　4．第2トレンチ掘り下げ状況(北から)
		5．第2トレンチ掘立柱(北東から)　6．第2トレンチ遺構完掘状況(北から)
		7．出土遺物
写真図版14	長楽遺跡	1．調査前(北東から)　2．第1トレンチ(西から)　3．第2トレンチ(西から)
		4．出土遺物
写真図版15	高山4号墳	1．調査前(墳丘から)　2．遺構検出状況(墳丘から)
		3．遺構掘り下げ状況(墳丘から)
写真図版16	高山4号墳	1．第1トレンチ(南西から)　2．第1トレンチ周溝外側輪郭検出状況
		3．第1トレンチ拡張部遺物出土状況(西から)
写真図版17	高山4号墳	1．調査地全景(奥が高山4号墳墳丘)
		2．第1トレンチ近代の溝と周溝(墳丘から)　3．出土遺物
写真図版18	大輪田・城内遺跡	1．調査前(南東から)　2．第1トレンチ遺構検出状況(東から)
		3．第1トレンチ遺構掘り下げ状況(東から)
写真図版19	大輪田・城内遺跡	1．大和川潜水橋と大輪田・城内遺跡(北から)
		2．第1トレンチ遺構掘り下げ状況(西から)
		3．第2トレンチ遺構検出状況(東から)
		4．第2トレンチ遺構掘り下げ状況(東から)
写真図版20	大輪田・城内遺跡	1．第2トレンチ埋甕検出状況　2．第2トレンチ埋甕完掘状況
		3．出土遺物

1．2005・2006・2007年度の埋蔵文化財発掘調査について

2005（平成17）年度には長楽遺跡第３次調査と池部三ツ池遺跡（古墳群）の調査を実施した。長楽遺跡については調査年度内に報告書を刊行したが、池部三ツ池遺跡では、現地調査が年度末に及んだことから、報告書作成に至らなかった。

2006（平成18）年度は４件の発掘調査を実施した。そのうちのひとつである池部三ツ池遺跡（古墳群）の調査は、2005年度の調査を第１次調査とし、2006年度の調査を第２次調査とした。この２カ年度に亘った調査の概要を今回合わせて報告する。また、同2006年度にはフジ山遺跡、川合大西遺跡、長楽遺跡第５次調査を実施した。

2007（平成19）年度には高山４号墳（高山塚４号古墳）及び大輪田・城内遺跡の発掘調査を実施した。

本報告書に掲載した６件の調査は全て開発に伴う緊急発掘である。６件中の４件は個人住宅建設に伴う調査であり、調査面積も狭小なものであったが、それぞれの調査で各遺跡における新知見を得ることができた。

また、本報告掲載の６件の遺跡は全て河合町の北半部に位置する遺跡である。

図１　河合町の位置

１池部三ツ池古墳群　２フジ山遺跡　３川合大西遺跡　４長楽遺跡　５高山４号墳　６大輪田・城内遺跡

図２　2005・2006・2007年度調査地位置図

2．池部三ツ池古墳群の調査

（1）はじめに

調査の契機と経過

今回の調査は、「奈良県遺跡地図」に「10－B－19（古墳状隆起）」と記載されている箇所の東側で、個人住宅に伴う土砂採取が計画されたことから、当該古墳状隆起の周溝等の遺構に及ぶことが考えられたため、発掘調査を実施したものである。

調査は平成17年度国庫・県費補助事業として第1次調査を実施した結果、「10－B－19（古墳状隆起）」に関する遺構は確認されなかったが、東に延ばしたトレンチ内で新たに古墳を確認した。調査の着手時期が3月であったため年度内に終了することは不可能となり、調査を中断し、翌平成18年度に第2次調査として実施することとなった。

第1次調査では、「10－B－19（古墳状隆起）」の東側に東西方向の2本のトレンチを設定した。南側のトレンチを第1トレンチとし、北側のトレンチを第2トレンチとした。

第1トレンチは東西7m、南北2mであったが、遺物の確認のため、北に1か所、南に2か所の拡張を行った。南西拡張部で須恵器が出土した他、現代溝の東側の南北拡張区で須恵器・土師器・陶磁器等が出土している。

第2トレンチは当初東西11m、南北2mであったが、土師器や石材が多く検出され、東に拡張した。第1トレンチとは異なり、現代溝のすぐ東側から土師器の破片が出土し、現地形から想定するよりかなり落ち込んだ位置で土師器皿・瓦器の破片がまとまって出土し、中世の遺構を思わせた。その後、東へ掘り進めるうちに、石材が検出され始めた。周辺には地山を掘り返したような土が広がり、また、3月には珍しく雪が積もるなどの不順な天候のために、明確な墓壙掘りかたを検出できないまま既に遺構内を掘り進んでいた。やがて石室の一部と考えられるようになり、さらに調査範囲を広げることが必要となったため、一旦埋め戻した。

第2次調査では、第2トレンチをさらに北と東へ1m拡張し墓壙の検出を行った。また、墳丘の確認を行うため、北側2か所にサブトレンチを設けた。

また、第1次調査時に実施した詳細な測量調査の成果から東側に別の古墳が存在する可能性が出てきたので、第2トレンチの東側に第3トレンチとして東西15.5m、南北3mのトレンチを設定し、調査を行った。第3トレンチについても調査の進展に伴い、北と南に拡張を行った。

遺跡名については、第1次調査時には中世の遺物が多く出土することから中世墓の遺構の存在が考えられ、複合遺跡として認識するために大字・小字名を用いて「池部三ツ池遺跡」とした。しかし、第2次調査終了段階で遺構としては2基の古墳を新たに確認したのみであったので、「池部三ツ池古墳群」と称することとした。また、それぞれの古墳については検出した順に西側を1号墳、東側を2号墳とした。

今回の調査地の北側では平成15年度に3本のトレンチにより道路工事に伴う発掘調査を行っているが、遺構・遺物の検出には至らなかった。

位置と環境

調査地は馬見丘陵の東支丘の稜線から派生する尾根の南斜面に位置する。河合町域の中央から北東寄りにある町立河合第一小学校の北側で、長林寺とは谷を一筋隔てた尾根に位置する。

河合町は奈良盆地の西部に位置し、奈良盆地の多くの河川が河合町周辺で大和川に合流することから、町名の起こりとなった。現在の河合町は面積8.27平方キロメートルの非常に小さな町であるが、町内には旧石器時代以降、断続的ながら各時代の遺跡が存在することが明らかになってきている。

旧石器時代の遺跡としては、町中部に位置し、馬見丘陵公園緑道エリア工事に際して奈良県立橿原考古学研究所により発掘調査された馬見二ノ谷遺跡と本書に掲載しているフジ山遺跡がある。

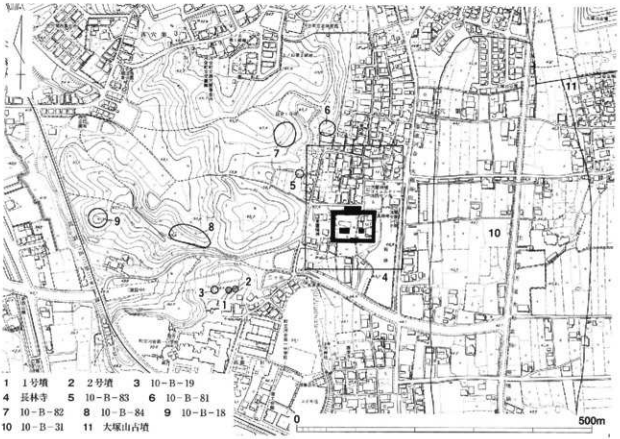


図3　池部三ツ池古墳群調査地位置図

縄文時代の遺跡としては、町北東部の平野部の微高地に形成された遺跡である長楽遺跡と宮堂遺跡が知られる。両遺跡ともに明確な遺構は検出されていないが、土器のほかに石器剥片なども出土しており、今後の調査によって遺構が確認される可能性がある。

弥生時代には王寺町舟戸と河合町大輪田にまたがる舟戸・西岡遺跡が形成される。特に舟戸山の山頂部には環濠を巡らせた高地性集落が営まれたものと思われる。この遺跡は眼下に大和川を望む立地であり、河川交通の要衝を押さえる位置でもある。また、本書に掲載した大輪田・城内遺跡の調査によっても弥生土器が出土しており、大和川流域に弥生時代の遺跡が広く分布しているようである。

古墳時代には川合大塚山古墳をはじめとして、多くの大型古墳が存在している。また、近年の調査で小型古墳の事例も増加してきている。その分布は大和川流域地域である町北部と、馬見丘陵公園周辺の町南部に集中する。町北部では大塚山古墳群（国史跡）、フジ山古墳がある。町南部では佐味田宝塚古墳・ナガレ山古墳・乙女山古墳（国史跡）、一本松古墳、倉塚古墳などが存在している。また、大塚山古墳の東側に位置する宮堂遺跡は大塚山古墳群と同時代の集落遺跡であろう。

飛鳥時代以降の遺跡としては、調査地の北東約150mの位置に長林寺が建立される。また、宮堂遺跡でも飛鳥時代に何らかの建物があったようである。さらに町域の西端の薬井に瓦窯が造られ、長屋王家に関わる建物に用いる瓦を製作していたようである。中世には大輪田・城内遺跡、市場垣内遺跡、居場垣内遺跡等の居館・城砦の遺跡が形成される。

以上のように河合町内には各時代の遺跡が分布するが、今回調査を実施した池部周辺では古墳分布の実態は長らく不明であり、古墳分布の空白地帯と言われてきた。明治15年4月に池部南谷において石棺が出土したとの記録[9]があり、その出土地は現在の町立体育館の北側付近にあたる。現状ではその痕跡をとどめておらず、長らく忘れ去られていた。地域での伝承としては過去に掘り出された石棺を水路などに転用したと語り伝えられてきたが具体的なことはほとんどわかっていない。その一例として、現在は池部の天神社近くに移築された「穴地蔵」

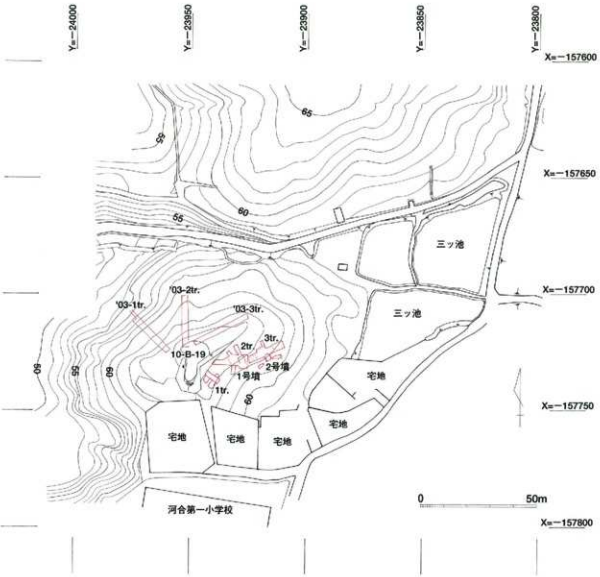


図４　池部三ツ池古墳群周辺地形図

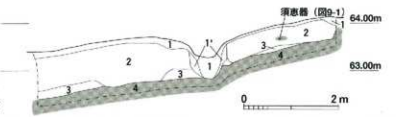
の石屋形がある。元は長林寺の南側、池部と穴闇との境にあり、都市計画道路整備に伴い現在地に移されたものである。その「穴地蔵」について地元での伝えでは石棺の一部ということになっているが、出土地の具体的な位置等は伝えられていない。室町時代以降のものと見られる。

※『陵墓等関係文書目録－末永雅雄先生旧蔵資料集－第１集』2005（社）橿原考古学協会　奈良県立橿原考古学研究所（編）

（２）遺構

第１トレンチ

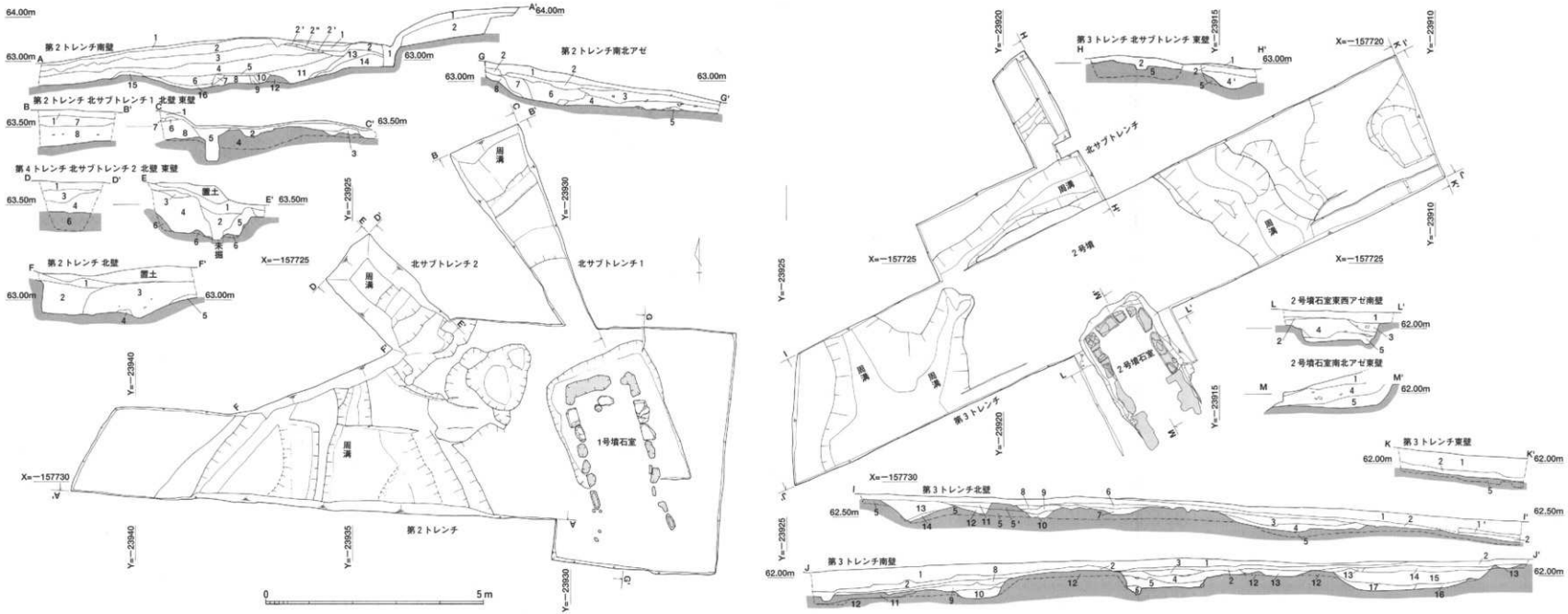
10－B－19の東側に設定した第１トレンチにおいては図５の土層断面図のようにしまりのない遺物包含層（2層）より須恵器（図9-1）や石製品（図9-32）が出土しているが、顕著な遺構は確認できなかった。特に須恵器



層位番号	土層名	土色補記号	備　考
1	黒褐色土	2.5Y3/1	表土
1'	オリーブ褐色土	2.5Y3/2	
2	黄褐色土	2.5Y5/4	しまりの悪い層。遺物を含む。
3	明褐色土	7.5YR5/6	2層よりしまる。遺物なし。
4	明赤褐色粘質土	5YR5/6	地山

図５　池部三ツ池古墳群第１トレンチ南壁土層断面図

図6　池部三ツ池古墳群調査地測量図



第2トレンチ南壁（A−A′）

層位番号	土層名	土色帖記号	備考
1	黒色土	7.5YR2/1	表土
2	灰オリーブ色土	5Y5/3	しまり悪い。
2′	灰オリーブ色土	5Y5/3	黒色土（7.5YR2/1）が混じる。
2″	黒色土	7.5YR2/1	灰オリーブ色土（5Y5/3）が混じる。
3	明赤褐色土	5YR5/6	
4	黄褐色土	10YR5/6	しまり悪い。遺物多し。
5	黄褐色土	2.5Y5/3	しまり悪い。
6	にぶい黄褐色土	10YR5/4	
7	にぶい黄褐色土	10YR5/4	11層によく似た層。やや赤みがかっている。
8	明赤褐色粘質土	2.5YR5/6	
9	黄褐色土	10YR5/6	
10	にぶい黄褐色土	10YR5/4	
11	にぶい黄褐色土	10YR5/4	しまり悪い。
12	橙色砂質土浅黄色砂質土	5YR6/82.5Y7/4	地山
13	明黄褐色土	10YR6/6	
14	橙色土	5YR6/82.5Y7/4	
15	灰黄色砂質土	2.5Y6/2	よくしまる。
16	明赤褐色土	5YR5/6	しまりよい。

第2トレンチ北サブトレンチ1（B−B′C−C′）

層位番号	土層名	土色帖記号	備考
1	黒色土	N2/0	表土
2	灰オリーブ色土	5Y5/3	砂粒、遺物含む。
3	明黄褐色土	10YR6/6	
4	明赤褐色粘質土	2.5Y5/8	地山
5	褐灰色土	10YR4/1	現代溝の埋土。しまり悪い。
6	明赤褐色粘質土	2.5Y5/8	現代の置土。7層よりやや明るい。
7	明赤褐色粘質土	2.5Y5/8	現代の置土。
8	オリーブ色土	5Y5/4	2層に近い。しまり悪く、遺物を含む。

第2トレンチ北サブトレンチ2（D−D′E−E′）

層位番号	土層名	土色帖記号	備考
1	黒色土	N2/0	表土。
2	褐灰色土	10YR4/1	現代溝の埋土。しまり悪い。
3	明赤褐色粘質土	2.5Y5/8	現代の置土。
4	オリーブ色土	5Y5/4	しまり悪く、遺物を含む。
5	明赤褐色粘質土	2.5Y5/8	地山。
6	明赤褐色砂質土	5YR5/6	地山。上層はしまりが悪く、灰白色（7.5Y7/1）シルトのブロックが混じる。下層は灰白色（7.5Y7/1）シルトがベースになる。粒子細かい。

第2トレンチ北壁（F−F′）

層位番号	土層名	土色帖記号	備考
1	黒色土	N2/0	表土。しまり悪い。
2	黒褐色土	2.5Y3/2	細かい土。しまり悪い。
3	明黄褐色土	2.5Y6/6	しまり悪く、遺物多く含む。
4	明赤褐色砂質土灰白色砂質土	2.5YR5/87.5Y7/2	薄い互層。
5	明赤褐色土	5YR5/8	

第2トレンチ南北アゼ（G−G′）

層位番号	土層名	土色帖記号	備考
1	暗褐色土	10YR3/3	表土
2	にぶい黄色砂質土	2.5Y6/4	土層はしまり悪く砂粒が多い。
3	明褐色砂質土	2.5YR5/6	しまり悪い。
4	黄褐色砂質土	10YR5/6	3層より粘性あり。
5	明褐色粘質土	7.5YR5/8	地山に近い質。
6	明褐色砂質土	7.5YR5/6	2層よりしまりはよい。浅黄色（5Y7/3）土塊を含む。
7	明褐色砂質土	7.5YR5/6	6層より浅黄色（5Y7/3）土塊を多く含む。6層とは同一層。
8	明褐色粘質土	7.5YR5/8	地山の土に近い。石室の裏込め土。

第3トレンチ北サブトレンチ東壁（H−H′）

層位番号	土層名	土色帖記号	備考
1	黄橙色粘質土	7.5YR7/8	宅地造成時の置土。
2	黒色土	N2/0	下層は灰黒色（2.5Y5/1）
4′	明赤褐色粘質土	5YR5/8	4層より少し赤い。
5	橙色砂質土	5YR7/8	灰白色（5Y7/2）粘土が面的に広がる。地山。

第3トレンチ北壁（I−I′）

層位番号	土層名	土色帖記号	備考
1	黄橙色粘質土	7.5YR7/8	宅地造成時の置土。
1′	黄橙色粘質土	7.5YR7/8	宅地造成時の置土。混入あり。
2	黒色土	N2/0	下層は黒灰色（2.5Y5/1）
3	にぶい黄褐色土	10YR5/4	しまり悪く、遺物含む。2号墳周溝。
4	橙色粘質土	5YR6/8	灰白色（5Y7/2）粘土塊含む。2号墳周溝。
4′	明赤褐色粘質土	5YR5/8	4層より少し赤い。
5	橙色砂質土	5YR7/8	灰白色（5Y7/2）粘土が面的に広がる。地山。
5′	にぶい黄褐色土	10YR6/4	根による地山の変質。
6	明赤褐色粘質土	2.5YR5/6	にぶい黄色（2.5Y6/4）土を含む。機乱層。
7	黄褐色土	2.5Y5/4	橙色（7.5YR6/6）土を多く含む。撹乱層。
8	橙色土	7.5YR6/6	黄褐色（2.5Y5/4）土混在。2号墳周溝。
9	黄褐色土	10YR5/6	2号墳周溝。
10	橙色砂質土	7.5YR6/6	地山に近い質の層。2号墳周溝。
11	灰オリーブ色土	5Y4/2	
12	灰オリーブ色土にぶい褐色土	5Y4/2.5YR5/4	
13	黄褐色土	2.5Y5/4	遺物あり。1号墳周溝。
14	明赤褐色土	5YR5/6	1号墳周溝。

第3トレンチ南壁（J−J′）

層位番号	土層名	土色帖記号	備考
1	黄橙色粘質土	7.5YR7/8	宅地造成時の置土。
2	褐灰色土	10YR4/1	旧耕作土。
3	オリーブ黄色土	7.5Y6/3	しまり悪い。
4	にぶい赤褐色土	2.5YR4/4	砂質土・粘質土の細かい互層。
5	オリーブ黄色土	5Y6/4	やや粘質。
6	暗赤褐色土	2.5YR3/6	砂質土・粘質土の互層。
7	明黄褐色土	2.5Y6/6	
8	黄褐色土	2.5Y5/4	やや赤みがかる。
9	にぶい黄色土	2.5Y6/3	褐色土粒が入る。
10	橙色土	5YR6/8	北壁4層と同じ。2号墳周溝。
11	淡黄色砂質土	2.5Y8/4	地山。
12	橙色粘質土	7.5YR6/8	地山。
13	褐灰色土	10YR5/1	旧耕作土からの掘り込み。
14	明褐色土	7.5YR5/8	砂粒多く含む。
15	明黄褐色土	10YR6/8	遺物を多く含む。1・2号墳周溝。
16	明褐色土	7.5YR5/6	灰白色（7.5Y8/2）粘土塊を含む。1号墳周溝。
17	橙色土	5YR6/8	灰白色（7.5Y8/2）粘土塊を含む。よくしまる。2号墳周溝。

第3トレンチ東壁（K−K′）

層位番号	土層名	土色帖記号	備考
1	黄橙色粘質土	7.5YR7/8	宅地造成時の置土。
2	黒色土	N2/0	下層は黒灰色（2.5Y5/1）
4′	明赤褐色粘質土	5YR5/8	4層より少し赤い。
5	橙色砂質土	5YR7/8	灰白色（5Y7/2）粘土が面的に広がる。地山。

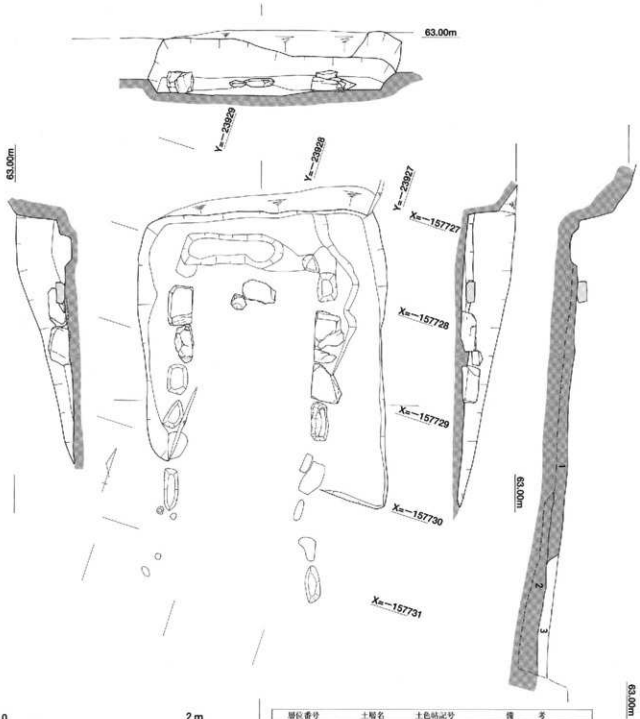
第3トレンチ2号墳石室東西アゼ（L−L′）

層位番号	土層名	土色帖記号	備考
1	黄橙色粘質土	7.5YR7/8	宅地造成時の置土。
2	褐灰色土	10YR4/1	旧耕作土。
3	オリーブ黄色土	7.5Y6/3	しまり悪い。
4	にぶい赤褐色土	2.5YR4/4	砂質土・粘質土の細かい互層。
5	オリーブ黄色土	5Y6/4	やや粘質。

第3トレンチ2号墳石室南北アゼ（M−M′）

層位番号	土層名	土色帖記号	備考
1	黄橙色粘質土	7.5YR7/8	宅地造成時の置土。
4	にぶい赤褐色土	2.5YR4/4	砂質土・粘質土の細かい互層。
5	オリーブ黄色土	5Y6/4	やや粘質。

図7　池部三ツ池古墳群第2トレンチ・第3トレンチ平面図及び土層断面図



層位番号	土層名	土色時記号	備　考
1	明赤褐色土	5YR5/6	地山
2	赤褐色粘土	2.5YR4/8	地山
3	暗赤褐色粘質土	2.5YR3/4	ややしまり悪い。盛り土。

図８　池部三ツ池１号墳石室平面図・立面図及び断面図

の周辺については土壙等の検出に努めたが、検出できなかった。また、土層の観察から、須恵器を包含する層の下位に石製品が包含されていたため、第１トレンチで掘削した土は全て中世以降に形成された層である。

１号墳

１号墳の墳丘は後世に掘削された溝により撹乱されているため正確にはわからないが、北西側に設けたサブトレンチ２で周溝が石室の主軸に対して斜行するという状況から直径約10mの円墳と考えるのが妥当である。１号墳・２号墳ともに尾根の南斜面を利用して築かれ、その石室はともに磁北に対してほぼ南に開口している。

埋葬施設は横穴式石室で、石材のほとんどは抜き取られていたが、残されていた石材と石材抜き取り痕から、

石室内法の規模を復元できる。石室の大きさは幅1.3m、長さ3.6m以上であったと推測できる。また、奥から見て左側壁（東側）は石材抜き取り痕の状況から左片袖の可能性も考えられる。この袖部とも考えられる部分に玄門を想定すると玄室の規模は幅1.3m、長さ2.5mとなる。羨道部については後世に削平され、羨門部は不明である。

残存していた石材は両側壁の基底の石が２石ずつと、左側壁の閉詰めの小さい石材が１石であった。右側壁南側の石材は長41.5cm、高さ24cm、奥行き20cmで、北側のものは長43cm、高さ23cm、奥行き26cmである。左側壁南側のものは長41.5cm、高さ19cm、奥行き32cm、北側のものは長42cm、高さ20cm、奥行き31.5cmである。石質は安山岩系のもので、風化が著しい。亀の瀬周辺で採取されたものであろう。

また、石室内の奥壁の抜き取り痕跡から14cm南に長辺の長軸に並行するように長36cm、幅23cm、厚さ10cmのやや扁平な石が上面をほぼ水平にして置かれ、その石縁の前に長16cm、幅15cmの円形の石が置かれていた。これらの石材は花崗岩系のもので、大きい方は少し赤みを帯びている。特に下面は赤色顔料が付着したように赤くなっている。この石が古墳築造当初に置かれたものであるなら棺台と考えられる。石室内は後世に再利用され、その後、石材を取るために乱掘されていることから、再利用の際に置かれた可能性もある。土師器塊（図9-９）がこの台状の石の約30cm前方で、口縁部の高さがほぼ台状石の上面に合致する状況で出土している。

玄門部と考えられるあたりを中心に土師器塊（図9-９）と同じく床面より約10cm上の攪乱層中から土師器や図9-8・11・20等の遺物が集中して出土している。床面に近い高さから図9-7の土師器壺が出土している。

石室の攪乱は墓壙の範囲全体に及んでおり、石室構築の際の裏込めの状況は把握できない。また、墳丘についても封土の流出が著しく、墳丘・石室の高さはともに不明である。墓壙は地山を掘り込んで形成しており、墳丘は石室の高さの半ばくらいから上に盛土を施していたと思われる。また、羨道部床面は盛土により整えている。石室床面の標高は62.2m前後で、石室開口部に向かって緩やかに下がっている。周溝底部の標高は北サブトレンチ２（墳丘背面側）で62.8m、第3トレンチ南壁（墳丘東側）で61.9m、第２トレンチ南壁（墳丘西側）で62.3mである。周溝底部の標高の違いは古墳の立地する地形の条件に合致している。

石室内や西側の周溝から須恵器の他、土師器や瓦器等が多く出土している。東側の周溝からも遺物は出土しているが、極めて少なく、小さな破片ばかりであった。

２号墳

墳丘の南側が流失しているので正確にはわからないが、第３トレンチ北側で検出された周溝が弧を描いていることから、２号墳は直径8.5mの円墳とするのが妥当であろう。周溝は墳丘の西側及び東側では直線的になるが、おそらく墳丘の前面には巡らされていなかったのではないだろうか。

埋葬施設は横穴式石室と思われるが、全ての石材が失われていた。石材の痕跡から、石室内法での大きさは幅1.05m、長さ2.8m以上であったと推定される。使用していた石材は、石材抜き取り痕の状況から、１号墳の石材よりも形状の整った板石状の石材であったと思われる。

石室内から須恵器高坏と鉄製品が出土している。いずれも原位置を留めるものではないが、鉄製品は石室のほぼ中央部、床面から約20cm上方で石材の砕片とともに出土している。須恵器高坏は石室の残存部での南東隅の床面直上から脚基底部の破片が、20cm上方から坏部破片が出土している。

石室床面の標高は61.7m、周溝底部の標高は墳丘の東側で61.55m、墳丘の西側で61.8m、墳丘北側で62.4mである。２号墳でも周溝底部の標高の違いは1号墳と同様に古墳の立地する地形の条件に合致している。

１号墳と２号墳の前後関係については第3トレンチ南壁の上層の状況と平面での検出状況から、1号墳の周溝の南東部を2号墳の周溝が切っており、1号墳が先で2号墳が後に築造されていることがわかる。２号墳では原位置を保った石室の石材はなかったが、抜き取り痕から想定される石材の形状及び石室の平面形態からも２号墳の築造時期を１号墳の築造時期より新しくとらえることは妥当であろう。

（3）遺物

『奈良県遺跡地図』10－B－19（古墳状隆起）の東に設けた第１トレンチでは須恵器と五輪塔空風輪等が出土している。

１号墳からは石室内及び西側の周溝から土師器・須恵器・瓦器等多くの遺物が出土した。須恵器は攪乱により破片となっており古墳の築造年代を具体的に示す資料は得られなかった。全体に平安時代後期から中世にかけての遺物が多いようである。

２号墳では石室内から須恵器高坏と鉄製品が出土しているのみである。

須恵器（図９－１～４）

１は第1トレンチの包含層（図５、２層）から出土したものである。胴部最大径15.0cm、残存高9.4cmを測る。上部が失われているため長頸壺のような器形も想定できるが、最大径になる部分が胴部の中央より下位であり、かつ頸部の径も小さいので球状の胴部に棒状のものが取り付くような特殊扁壺に類する形状が考えられる。しかし、胴部に開口部が無く、棒状のものが取り付くと焼成が困難になると思われるので、筒状のものが取り付くのであろう。これまでに知られている特殊扁壺とも異なるものかもしれない。肩部には櫛歯列突文が断続して施されている。底部は割れの観察から、成形の最後に底部の穴を塞いだ後、表面の調整を行ったようである。

２は２号墳の石室内から出土した高坏である。無蓋高坏で脚部の３方に２段の透かしを持つようである。攪乱により原位置を留めるものではなく、９点の破片が出土しているが、全てが同一個体かどうかはわからない。ただし、胎土、焼成の状況等から同一個体として復元し図示した。復元で口径10.6cm、底部径11.5cm、器高17.1cmである。

３は1と同じく第1トレンチの包含層（図５、２層）から出土したものである。出土位置は1より少し北であった。瓶や長頸壺の口縁部と考えられる。外面に2条の沈線が見られる。残存部での最大径は6cmに復元できる。外面は赤灰色（2.5YR4/1）、内面は灰色（5Y5/1）、断面は灰白色（5Y7/1）を呈す。

４は坏蓋の破片と考えられる。第1トレンチの北拡張区2層から土師器や磁器集付とともに出土している。焼成はやや軟質で外面は灰色（7.5Y6/1）、内面・断面はオリーブ灰色（2.5GY6/1）を呈している。

５は1号墳石室の南傾斜面の裾部で採集した須恵器である。壺等の肩部とも考えられるが明瞭な稜線が見られず、底部として図示している。

土師器（図９－６～21）

６は1号墳の北西側の北サブトレンチ１の第2層から出土したものである。器壁厚が1.5cmあり、直立する断面形状から堵幅の基底部の可能性もあるが、移動式竈等の土師器の大型品の基底部と推定される。内面に原体が14本／13mmの細かい斜め方向のハケ痕が残っている。焼成は軟質で、胎土は細かく脆い。外面は橙色（5YR7/8）、内面は淡黄色（2.5Y7/4）である。

７は広口の壺と考えられる。4破片から図上復元したが、直接接合しないものの同一個体と見られる破片は他にもある。口径は6cm、頸部径は3.5cm、胴部径は15.6cmになる。焼成は軟質で、黒斑がある。きめの細かい胎土で、ナデにより表面の調整を行っている。外面は赤色（10R5/6）、内面及び断面は明赤褐色（2.5YR5/6）である。１号墳石室内で出土したものである。

８は脚の取り付き部分が見られるので高坏の坏部と考えられる。７と同様の明赤褐色を呈し、細かい胎土である。石室攪乱土中の７よりも少し高い位置から出土した。これも同一個体と思われる破片は複数あるものの接点がないので２個の破片より図上復元した。口径は18.0cmで残存高は5.5cm。口縁端部は内側に凸線状になる。表面の調整は状態が良くないので不明。

９は埦。１号墳石室内で口縁を上にして出土している。直径は長径が19.0cm、短径18.5cmでやや楕円形である。器高は4.9cmで、うち高台の高さが0.5～0.8cmである。高台断面は三角形で、高台の直径は

8.5cmである。外面調整はユビオサエののちヨコナデ。内面調整は見込み部がハケで、上半部はハケの後にヨコナデが施されているようである。口縁の端部は少し外反させながらナデている。形態的には瓦器埦を思わせる特徴を持っている。胎土は細かく、色調は明赤褐色（5YR5/6）である。

10は口縁が完全には残っておらず、底部の破片も見当たらなかったので詳細は不明であるが、甕のようである。胴部の湾曲の状況から底は丸くなると思われる。胴部の最大径は25.2cm、頸部径は23.2cmに復元され、器高は丸底であれば19cm程度と思われる。外面はヨコハケ調整で、胴部の上3分の1から口縁部はヨコナデ調整である。内面はユビオサエののちナデで仕上げている。内面の頸部から上は表面の剥離が見られる。胎土はやや粗く、砂粒を含んでいる。色調は橙色（5YR6/8）である。9の近くで出土した。

11は小型の甕である。口径は復元で10.6cmであるが、もう少し内傾させてもよいかも知れない。7のすぐ南側で出土した。色調は10よりも黄みがかった橙色（7.5YR7/6）で砂粒を多く含むやや粗い胎土である。外面胴部にはタテハケの痕跡が僅かに残っている。

12～21は皿である。

12は大型品で、復元径15.1cm、器高2.5cmである。色調はにぶい赤褐色（2.5YR4/4）。底が僅かに盛り上がる。

13も大型品で、復元径13.7cm、器高3.0cmである。色調は赤褐色（10R5/4）。口縁端部の外面を面取りぎみに調整している。12・13はともに1号墳の西側周溝部の4層から出土した。

14はほぼ2分の1が残存している。直径は10.5cm、器高は1.7cmである。にぶい褐色（7.5YR5/3）。

15は完形に近い個体であるが、口縁端部を欠いている。直径は長径9.4cm、短径9.0cmでやや楕円形である。器高は1.5cmに復元される。色調は赤橙色（10R6/6）で、12・13より明るい色合いである。14・15も1号墳の墓壙北端付近攪乱土からの出土。

16も完形に近い個体である。直径9.5cm、器高1.9cm。色調はにぶい黄橙色（10YR7/4）を呈し、12～15に比べて白っぽい色合いである。中央がやや盛り上げるヘソ皿。1号墳右室内攪乱土中の7と11の間で出土した。

17～21は12～16よりも小さな破片で、完形には復元できなかった個体である。

17は図上復元で直径9.0cm。器高1.3cm。厚さは0.3～0.4cmで最も薄い。色調は明黄褐色（10YR6/6）。

18は図上復元で直径16.6cm、器高も図上復元で2.8cmになる大型品である。口縁端部は少し外反する。色調は淡黄色（2.5Y8/3）で、断面が黒色（2.5Y2/1）を呈している。

19は表面の剥離が著しく、口縁端部を欠いているが、図上復元で直径15.2cm、器高2.5cmとなる。口縁部が段状になる。色調は橙色（7.5YR7/6）である。17～19も1号墳の墓壙北端付近攪乱土からの出土。

20は8の少し下位で出土。図上復元で直径9.8cm、器高1.4cmである。色調は明黄褐色（10YR7/6）。

21は8とほぼ同じ高さで8から80cm奥壁寄りの位置から出土した。復元径は10.6cm、器高1.6cm。

瓦（図9－22）

22は平瓦の破片である。上面には細かい布目が残り、下面にはナナメ格子タタキが見られる。上面は黄灰色（2.5Y4/1）、下面は黒色（10YR2/1）を呈している。細かい胎土で焼成はやや軟質である。1号墳西側周溝部の出土。

瓦器（図9－23～26）

23～25は埦で、26は皿である。

23は完形に復元できた個体である。口径は14.9cm、器高は5.1～4.7cmでやや歪になっている。高台の断面は三角形で、高台部の高さは0.5cm、下端での直径は4.8cmを測る。内面に暗文が残るが、表面が摩耗している。1号墳墓壙の北東隅部の床で床面より65cm高い位置（図6土層G－G´の7層）から出土した。

24は高台部が4分の3程度及び若干の体部が残る個体で、口縁部を欠いている。復元径は14.2cm以上となる。残存高は3.6cm。23と8のちょうど中間で、石室床面より56cm高い位置（図6土層G－G´の6層）から出土した。

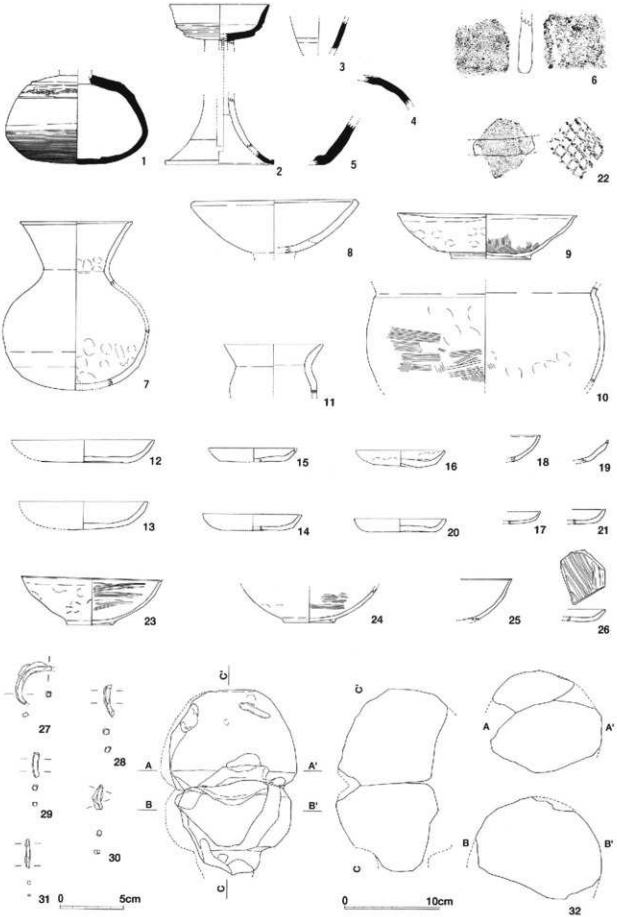


図9　池部三ツ池古墳群出土遺物　(1～26・32　S=1/4、27～31　S=1/3)

25は図上復元で直径が15.8cm程度になる。23と比較して少し口縁の湾曲が強く、深い形状になる。口縁端部はよく似た形態である。23・24の上層で出土。

26は口縁が僅かにしか残っておらず、直径の復元は困難である。器高は1.3cm。1号墳の墓壙北端付近撹乱土からの出土。

鉄製品（図9－27～31）

2号墳の石室内から5点出土している。

27はC字状に曲り、太い方から見て左巻きに捩じれている。両端共に折損している。断面は上部は横長の長方形で、下部はやや正方形に近い形状をしている。一方が細くなる。残存長5cm、太さは4mm～3mmである。

28は太い方から見て左巻きに捩じれている。半ばから緩く曲っている。断面の形状は正方形に近い形状をしている。残存長は2.7cmで、一方が細くなり、太い方の太さが5～4mm、細い方が4mm～3mmを測る。

29はほぼ直線状を呈する。残存長は2.0cm。太い方の断面形状は幅の狭い台形で、太さは長辺4mm、短辺が3mmを測る。

30は残存長2cmで、緩やかな弧線状である。両端は折損し、一方が細い。断面はほぼ正方形で、太さは太い方が4mm、細い方は3mmを測る。29と接合するようである。

31は直線状で残存長は2.2cmである。断面は一方が一辺3mmの正方形で、他方に向かって長辺2mm、短辺1mmの扁平な長方形になっている。

石製品（図9－32）

32は凝灰岩製で石塔の一部と思われる。五輪塔の空輪と風輪が一体で作られた空風輪と思われる。空輪部の直径は現状で13.2cm（図上復元14.4cm）、高さ10.2cm、風輪部の現状の直径11.7cm（図上復元13.2cm）、高さ6.5cmを測る。風輪の下部には火輪に設けられたであろうほぞ穴に差し込むほぞが作られている。ほぞの直径6.8cm、ほぞの高さは2.6cm以上で、ほぞを含めた残存部の総高は19.5cmを測る。

第1トレンチの東端付近の2層から出土した。検出時は水分を含み非常に脆い状態であったので、掘削作業中に部分的に欠損した。

（4）まとめ

池部三ツ池古墳群の築造年代は、2号墳が7世紀初頭から前葉にかけての時期であり、1号墳は2号墳より古いと考えられ、6世紀後葉～末頃の築造としてよいだろう。池部三ツ池古墳群は丘陵尾根頂部から東へ順に築造されたと想定すれば、奈良県遺跡地図10－B－19（古墳状陥起）は1号墳より古い6世紀中頃～後葉の時期の古墳と考えられる。10－B－19の近くから出土した須恵器1・3・4はこの10－B－19から掘り出されたものとみても年代的に大きな齟齬はないのではないだろうか。

1号墳の石室撹乱土中より出土した土器の状況から、1号墳は平安時代から鎌倉時代には石室が開口しており、再利用されていたと考えられる。その後、おそらく近世に石材を入手するために石室が破壊されたのであろう。2号墳については、石室内からは須恵器と鉄製品が出土したのみであり、後世の頻繁な再利用は考えにくい。早いうちに石室の閉口部が埋もれてしまったのであろう。

池部三ツ池古墳群の北東に存在する長林寺は聖徳太子建立という伝承を有しているが、その文献上の初見は鎌倉時代のことである。発掘調査での所見から、聖徳太子が活躍した時代には前身建物的な瓦屋根を持つ建物はあったと推定されるものの、本格的な寺院として伽藍が整うのは7世紀後半になってからのことと考えられるようになった。池部三ツ池古墳群は大塚山古墳群が城山古墳の築造で終焉を迎えた後、長林寺が建立されるまでの間の時期に築造されるのである。この古墳群を残した人物及びその子孫が長林寺の建立に大きな役割を担っていたと考えられる。

3．フジ山遺跡の調査

（1）はじめに

馬見丘陵の北端の佐味田川と大和川の合流点の東側に位置し、独立丘陵状を呈するフジ山において、駐車場及び資材置場とするための造成が計画された。フジ山の東頂上部では旧石器が採集され、また西頂上部に大型円墳のフジ山古墳が存在することから、フジ山全体を遺物散布地の範囲としてきた。しかし、具体的な発掘調査例がなく、今回の工事の実施に先立ち、本発掘調査の要否を判断するために試掘調査を実施した。

事業地はフジ山の北西部分で大部分が傾斜地である。調査は緩斜面及び平坦面を中心に、12箇所のトレンチを設け人力で掘削を行った。

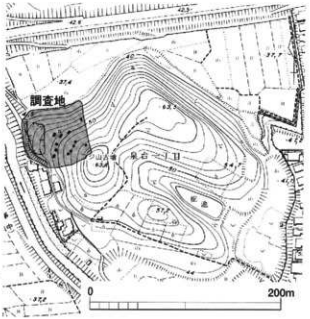


図10　フジ山遺跡調査地位置図

（2）遺構

今回の調査では明瞭な遺構は検出されなかった。

表土（第１層）を除去するとしまりのよい堆積土（第２層）があり、山の下方に行くほど堆積土（第２層）の厚みが増す傾向にある。

特に、第12トレンチは西側の支尾根と東側の支尾根の谷間にあたり、堆積土が深く、調査では地山面までの掘削はできなかった。

それぞれのトレンチで地山面は表土面より傾斜が急である。

図11　フジ山遺跡トレンチ配置図

（3）遺物

調査により出土した遺物は土師器破片が４点と瓦破片が１点、及び石材が３点である。フジ山古墳に近い第２・第６トレンチの表土から安山岩系の石材が出土している。この石材はフジ山古墳の周辺に散布している石材と同じもので、フジ山古墳に葺石または石室石材として用いられた石材と見られる。第６トレンチでは表土に近い第２層からも同質の石材が出土している。

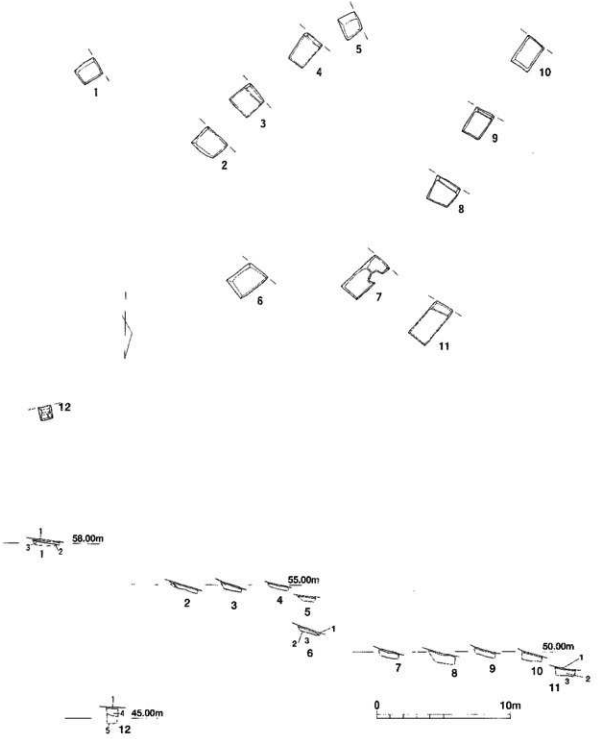
調査地の南端に近い第５トレンチの表土（第１層）及び堆積土（第２層）、第10トレンチの表土から土師器の破片が出土している。小片であるため時期を決定できるようなものではないが、おそらく中世以降の擂明皿のようなものと思われる。

（4）まとめ

今回の調査により、フジ山の北西部分には明確な遺構は存在しないものと考えられる。フジ山は北側より南側の傾斜が緩く、また、今回の調査で若干の遺物が出土していることから、山頂部のフジ山古墳の西側平坦面（今

回の調査対象地の南側）に中世以降の遺構が存在する可能性がある。

また、当該地の道路に接する西側には過去の地形図から平坦面があり、その部分に何らかの遺構が存在するものと考えられたが、調査以前の古い時期に土砂採取が行われていたようで、この平坦面はすでに失われている。土砂採取により形成された崖面の観察からは明瞭な遺構は見出せなかった。



層位番号	土層名	土色帖記号	備　考
1	黒褐色土	5YR2/2	表土
2	黄褐色粘質土	10YR5/6	埋積土
3	淡橙色粘質土	10YR7/8	黄橙色（7.5YR7/8）粘土・2.5YR7/2（灰黄色）粘土が縞状に入る。
4	明黄褐色粘質土	2.5YR7/6	第12トレンチのみ。堆積土
5	橙色粘質土	5YR6/8	第12トレンチのみ。堆積土

図12　フジ山遺跡トレンチ平面図及び土層断面図

4．川合大西遺跡の調査

（1）はじめに

調査地は川合城山古墳の周辺に広がる奈良県遺跡地図10－B－20の遺物散布地に該当する。この遺物散布地10－B－20については、これまでほとんど発掘調査はなされていないため、遺跡の具体的な内容については不明な部分が多い。遺構の分布やつながりも10－B－20全体で把握できているものはないので、今回の調査地については、小字名を取り、川合大西遺跡とする。今後周辺地域での調査の成果によっては、遺跡の範囲や名称の変更を必要とすることになる。

今回の調査は、当該地で専用住宅の建て替えが計画され、基礎工事による影響が遺構に及ぶことが考えられたため、工事に先立ち調査を実施することとなった。調査は2か所にトレンチを設定し、人力により掘削した。

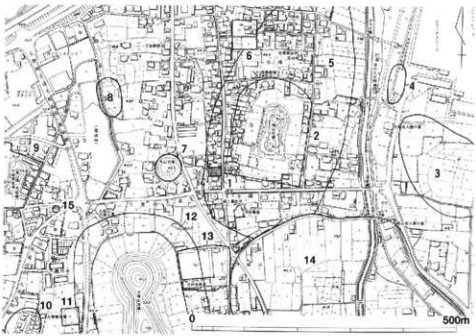


図13　川合大西遺跡調査地位置図

1　調査地　2　城山古墳
3　10－B－77　4　10－B－76
5　10－B－20　6　市場垣内遺跡
7　丸山古墳　8　10－B－72
9　中良塚古墳　10　穴闇関田遺跡
11　丸留塚古墳　12　大塚山古墳
13　居場垣内遺跡　14　宮堂遺跡
15　10－B－78

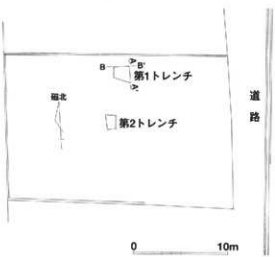


図14　川合大西遺跡トレンチ配置図

（2）遺構

第1トレンチでは顕著な遺構は確認できなかった。トレンチの掘削は地山面まで至っていない。中世以降の包含層を確認するにとどまった。

第2トレンチでは掘立柱を検出した。柱の最下部より約10cmで、両側に2本の添え木を水平方向に釘で打ち付けていた。また、柱掘え付け穴の底より45cm上で、土で柱を固定した後に20cm大の石を置き柱を安定させていた。柱を据え付けて埋め戻した土の中から染付の碗の破片が出土している。

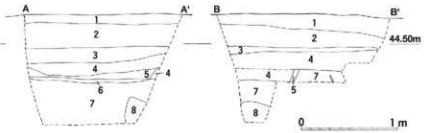


図15　川合大西遺跡第1トレンチ土層断面図

（3）遺物

今回の調査で出土した遺物には、サヌカイト・埴輪・須恵器・土師器・瓦器・陶磁器・木柱・釘・鉱滓がある。このうち図示可能なものは次の通りである。いずれも第２トレンチから出土した。

埴輪（図17－1）

外面をヨコハケ調整で仕上げ、内面は磨滅が著しいため調整は不明。外面は鈍い黄橙色（10YR7/4）、内面は橙色（5YR7/8）を呈する。城山古墳の埴輪に近い特徴を持つ。

須恵器（図17－2・3）

２は坏や高坏の蓋の破片と考えられる。外面はオリーブ黒色（5Y3/1）、内面は暗青灰色（5PB4/1）を呈する。

３は壺・甕の底部と考えられる。ただし、底部の面が平滑さに欠けるので、肩部になるかも知れない。

瓦器（図17－4）

掘立柱を据え付け埋土内からくらわんか手の染付とともに出土したものである。内面に暗文、外面にハケ状工具の痕跡がある。

層位番号	土層名	土色頻記号	備考
1	黒褐色土	10YR3/2	1tr.しまりのない土。庭の表土。
2	黄橙色土	10YR8/8	1tr.盛土。
3	灰黄褐色粘質土	10YR4/2	1tr.細かい粘質土。瓦礫混。
4	褐灰色粘質土	10YR4/1	1tr.
5	赤褐色粘土	10R6/6	1tr.
6	緑灰色土	7.5GY5/1	1tr.
7	灰黄褐色土	10YR4/2	1tr.シルト。遺物包含層。下位になるにつれて砂粒の粒径が大きくなる。水を含む層。
8	暗青灰色粘土	10BG4/1	1tr.発気の強い粘土。
9	黒褐色土（黒褐色土）	7.5YR3/1（10YR3/1）	2tr.しまりのない土。庭の表土。
10	青灰色土	10BG5/1	2tr.
11	暗褐色土	10YR3/3	2tr.
12	黒褐色土	10YR3/2	2tr.細かいシルト。
13	灰黄褐色土	10YR4/2	2tr.シルト。1tr.7層と近似。
14	後黄色砂	5Y7/3	2tr.
15	青灰色粘土	10BG6/1	2tr.
16	青灰色粘質土	10BG5/1	2tr.

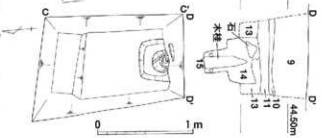


図16　川合大西遺跡第２トレンチ平面図・土層断面図

（4）まとめ

今回の調査では中世以降の包含層を確認し、また、18世紀以降の掘立柱遺構を検出した。中世以前の遺構面は確認していない。

第２トレンチで検出した柱については、調査区の横の泉水中に数本の柱が並んでおり、これらに対応するものと思われる。現在の居住者の方に伺ったところでは、入居された当時に既に柱は存在していたということである。抜こうとしたが硬くて抜けないのでそのままコンクリートで周りを固めたとのことである。この話からすると現在も地表に出ている柱も同様の構造をしているものと考えられる。当調査地は現在居住者が入居される以前は小料理屋であり、中庭の泉水も当時から存在していたとのことである。しかし、柱はすでに上部構造が無くなり、朽ちかけた状態で露出していたということである。したがって、少なくとも50年以上前に、この泉水の上に掘立柱で支えた上部構造のものがあったと考えられる。

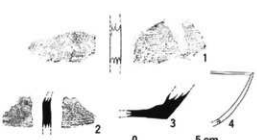


図17　川合大西遺跡出土遺物（S=1/3）

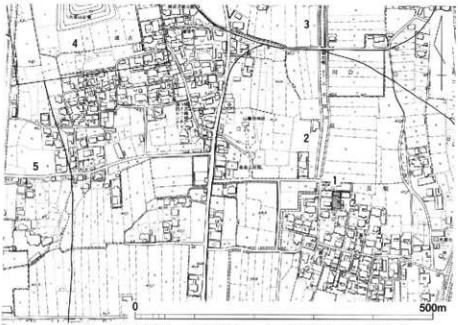
調査地周辺は遅くとも江戸時代以降の大和川舟運によって栄えた地域である。現在の大和川にかかる御幸橋の東南側にあった船着場「川合浜」で多くの荷物が積み下ろしされていた。この川合浜から南に向う通りの両側には多くの店が並び大いに賑わっていた。当調査地より北側一帯を「市場」と称するのはこの大和川舟運によって市が形成されていたことに拠っている。当調査地にあった小料理屋もその繁華街の中の一つであった。しかし、1892（明治２）年に現在のJR関西本線が開通し、大和川舟運は衰退し、廃止された。

5．長楽遺跡第５次調査

（1）はじめに

長楽遺跡は大塚山古墳の南東、宮堂遺跡の南に広がる遺物散布地で、これまでに４次の発掘調査を実施している。

今回の調査は、当該地で専用住宅の建て替えが計画され、基礎工事による影響が遺構に及ぶことが考えられたため、工事に先立ち調査を実施することとなった。調査は２か所にトレンチを設定して行った。北側のトレンチを第１トレンチ、南側のトレンチを第２トレンチとした。第１トレンチは整地土の掘削は重機により、遺構面の確認、精査は人力によった。



1　調査地　2　長楽遺跡　3　宮堂遺跡　4　大塚山古墳　5　10－B－31

図18　長楽遺跡調査地位置図

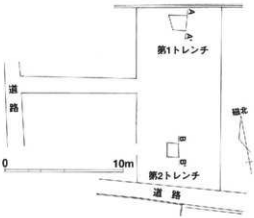
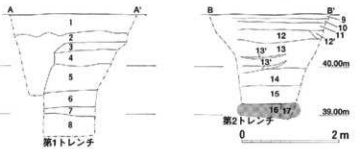


図19　長楽遺跡トレンチ配置図

（2）遺構

調査では明確な遺構は検出できなかった。第１トレンチでは２mの深さまで掘削を行ったが、これ以上の掘削は危険であると判断し、遺物が含まれる層を確認したのに止まり地山面には達しなかった。１層２層は直近の盛り土。３層は調査前に存在した建物のための整地土。4層は旧耕作土。８層は中世の遺物包含層である。

第２トレンチでは地山面を確認し、複数の小孔を検出したが、調査面積が狭く、その性格は明確ではない。16層が地山であるが、よく締まった粗い砂層である。地山直上の15層には多くの遺物に混じって炭や砂の塊が見られる。



層位番号	土層名	土色略記号	備考	層位番号	土層名	土色略記号	備考
1	明赤褐色土	5YR3/6	2cr.	11	黒褐色土	10YR3/1	2c. 瓦礫、瓦土、炭混
2	暗赤褐色土	10R3/3	3cr. 礫を、礫を含む。	12	オリーブ褐色土	2.5Y4/4	2c. 10層より、まり悪い。
3	黒褐色土	10YR3/2	3cr. 粗粒土、砂質粘質土。	12'	暗オリーブ褐色土	2.5Y3/3	2c. 10YR3/1褐色土がブロックで入る。10層上のようなものか。
4	黒褐色粘質土	10YR3/2	3cr. 10層色土、礫含む。	13	オリーブ褐色粘質土	2.5Y4/6	3c. 礫含む。瓦礫から上を切り入れたものか。
5	黒褐色粘質土	7.5YR3/2	3cr. 4層よりきめが細かく粘質が強い。 礫含む。	13'	にぶい黄色土	2.5Y6/3	2c.
6	暗褐色粘質土	7.5YR3/3	3cr. 砂質層、 礫含む。	14'	黒灰色土	2.5Y5/1	2cr.
	若灰色砂質土	10BG5/1					
7			2cr.	14	にぶい黄褐色粘質土	10YR5/4	3cr. 瓦質土器の破片あり。
8			2cr. トレンチ北に高温・土器焼成の痕跡あり。	15	黒褐色粘質土	7.5YR2/3	2cr. 礫含む（多い）。炭粒・瓦礫・瓦質・須恵器、7.5YR5/4ブロックを含む。
9	灰黄褐色土	10YR4/2	2c.	16	にぶい黄褐色砂	10YR6/3	2cr. 粗い砂。よく締まる。
10	明赤褐色砂	5YR5/8	2c. 粘質が大きい砂	17	褐灰色砂質土	5YR4/1	2cr. 礫少ない。1.2cmが多い。

図20　長楽遺跡トレンチ土層断面図

（3）遺物

今回の調査で出土した遺物としては、弥生土器・サヌカイト・須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・瓦・陶磁器がある。

弥生土器（図21－1）

壺の頸部の破片と考えられるもので、櫛描きの直線文を施している。内外面ともに明赤褐色（2.5YR5/6）を呈している。第２トレンチから出土した。

須恵器（図21－2）

第1トレンチ5層から出土したもので、甕の破片と思われる。外面に並行タタキ痕が見られ、内面には同心円文の当て具痕が見られる。灰色（N5/0）を呈し、断面は赤灰色（2.5YR5/1）を呈している。

土師器（図２１－３・４・５）

3は土師器の移動式竈の取っ手部分と思われる。第２トレンチからの出土。外面は鈍い黄橙色（10YR6/3）、内面は灰褐色（7.5YR4/2）、断面は橙色（5YR6/8）を呈している。胎土はやや粗く、径１mm程度の砂粒を多く含む。

4は甕の口縁部である。外面に煤が付着している。黄灰色（2.5Y5/4）を呈し、断面は黒色（N2/0）である。第2トレンチ14層から出土。

5も甕の口縁部である。体部に板で押さえているために、垂直に近い角度になっているが、小さな破片であるためもう少し丸みを帯びるようである。全体に黄灰色（2.5Y5/1）を呈している。図上復元では口径は16.6cmになる。第1トレンチ8層の掘削底面から6とともに出土した。

瓦器（図21－6）

埦の底部である。見込み部分に暗文を施す。高台の断面は逆台形である。

瓦質土器（図21－7・8）

7は擂鉢の口縁部。口径は復元で30.5cmを図る。第2トレンチ出土。

8は擂鉢の底部である。底径は12.0cm。第２トレンチ14層出土。

瓦（図21－9）

軒丸瓦で瓦当が剥離している。上面はヘラで削って整えている。内面に布目が残る。

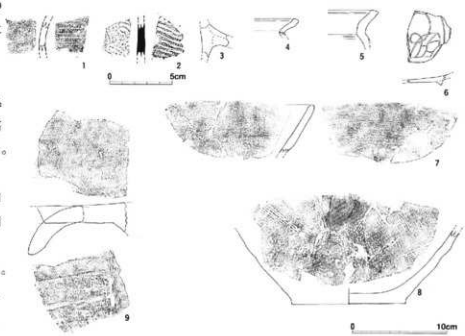


図21　長楽遺跡出土遺物　（1・2　S=1/3、3～9　S=1/4）

（4）まとめ

調査地の南端に設定した第２トレンチでは地山を検出したが、北端の第１トレンチでは地山面を確認できなかった。南側の寺院の方向から数次に亘り整地を行い、集落の平坦面を北側に拡張したようである。本調査地は本来は南から北に傾斜する地形であったが、近世に現地盤近くの高さまで埋め立てて造成され、耕作地として利用されてきたようである。

6．高山４号墳（高山塚４号古墳）の調査

（1）はじめに

調査地で個人住宅の建て替えがおこなわれることとなり、発掘調査を実施した。建設される建物は平屋であるため、基礎工事に伴う掘削は30cm程度であり、２か所のトレンチにより、この掘削深度の範囲内での遺構検出を主眼とした。

第１トレンチ、第２トレンチともに墳丘から約３mの位置に畔を残したが、これは事業者との事前協議により基礎の通る部分は掘削しないとしたためである。建物から外れる両トレンチの墳丘寄りでは、遺構の確認をするために他の部分より深く掘削をおこなった。

なお、古墳の名称について、現状の墳丘部分が史跡指定時に「高山塚４号古墳」とされたが、指定に先立つ測量調査の報告でも高山４号墳という名称が併用されていること、地元では高山（塚）と呼ばれていないことを踏まえ、本来は地名により呼称すべきであるが、遺跡名としては略称として通用している「高山４号墳」としておく。

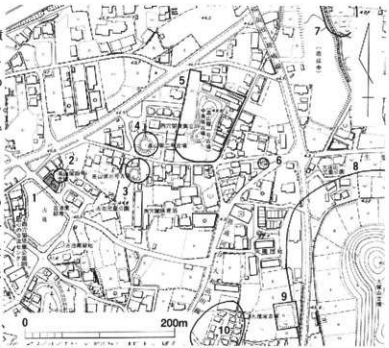


図22　高山４号墳調査地位置図

（2）遺構

第１トレンチでは周溝の両肩を確認した。現状の墳丘は後世の開墾により耕作地に取り込まれている様子がわかる。６・６′層は周溝を埋めている層であるが、この層から染付の磁器が出土しており、近世に形成された層である。トレンチの中央部で馬の骨・歯とともに開元通寶が出土している。検出面から下がったところで若干周囲と土質が異なっている様子が観察されたが、近世の層の中に納まる。地権者の話では既存建物の建

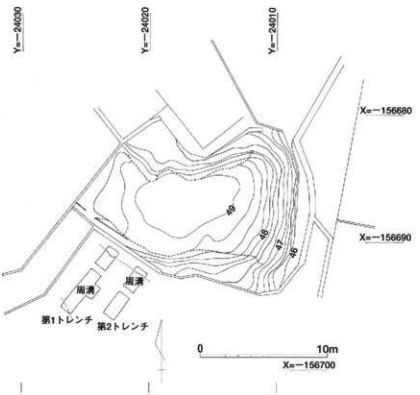


図23　高山４号墳墳丘測量図

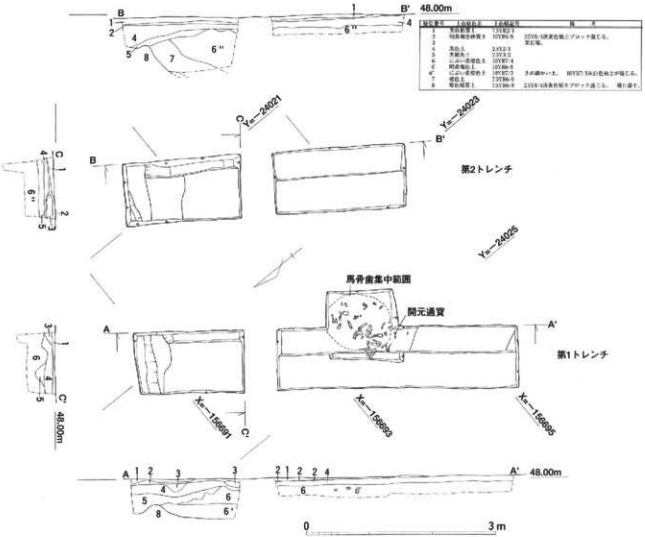


図24　高山４号墳トレンチ平面図及び土層断面図

設前に畑の耕作に伴い骨が多数出土していたようである。

第２トレンチでは墳丘の広がりを確認したが、周溝の幅は確定できなかった。

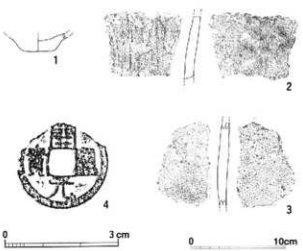


図25　高山4号墳出土・採集遺物（1～3　S=1/4、4　S=1/1）

（３）遺物

今回の調査により出土した遺物は弥生土器・須恵器・瓦器・陶磁器・馬骨・馬歯等である。

１は弥生土器の壺の底部と考えられる。

２・３は草刈りの際に採集された埴輪である。

４は中国の唐朝の貨幣「開元通寶」である。

（４）まとめ

今回の調査により、僅かな範囲ではあるが高山４号墳の周溝を確認することができた。これにより、現状で南北10m×東西16m程度の墳丘は、本来は直径20m以上あったことが推測される。第１トレンチで検出された馬骨と銅銭は古墳と直接関わるものではなく、また、銅銭が意図的に埋められたかどうかは確認できなかった。

7．大輪田・城内遺跡の調査

（1）はじめに

調査地で個人住宅の建設が行われることとなり、事前の発掘調査を実施した。事業者との協議により、住宅建設部分に２本のトレンチを設定し、掘削を行った。

大輪田・城内遺跡は、中世に調査地周辺にあったとされる大輪田城の範囲と推定されている。大輪田城については、現在の大輪田及城内の集落の周りに広がる田畑で遺物の散布が見られる他、城砦の存在を思わせる小字名、土塁の名残状の地形等から推測されているものの詳細は不明である。今回の調査地は遺跡の中心と推定される天満宮に近く、大輪田城関連の遺構が検出される可能性があった。

1　調査地　2　大輪田・城内遺跡　3　舟戸・西岡遺跡

図26　大輪田・城内遺跡調査地位置図

調査は住宅建設予定部分に東西８m、幅２mのトレンチを２本設定し、遺構検出面までの掘削を重機により、遺構内については人力によって行った。

（2）遺構

第１トレンチでは地山を掘り込む土壙を３基検出した。

土壙１は東西５m、南北は1.6m分を検出した。第２トレンチで対応する遺構が検出されていないので、南北は4.5m以上にはならず、楕円形を呈している。深さは地山面から0.7mである。

土壙２は土壙1の埋没後に掘削されている。東西

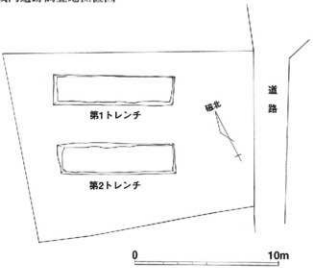
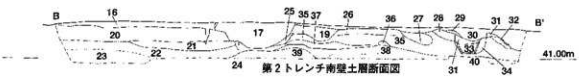
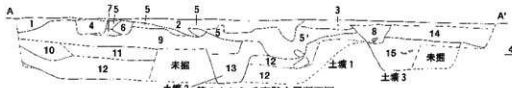


図27　大輪田・城内遺跡トレンチ配置図

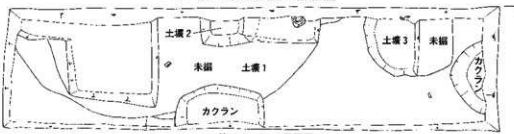


第2トレンチ南壁土層断面図

第2トレンチ平面図



第1トレンチ南壁土層断面図



第1トレンチ平面図

0 3m

層位番号	土色記号	土色名称	特徴
1	7.5YR4/4	褐色	現耕土。20世紀の耕作土。
2	10YR4/3	褐色	旧耕土。
3	10YR6/4	黄褐色	旧耕土。
4	10YR5/1	褐灰色	旧耕土。
5	2.5YR3/3	暗赤褐色	旧耕土。
5'	10YR3/3	暗褐色	旧耕土。
6	10YR3/3	暗褐色	旧耕土。
7	10YR3/2	黒褐色	旧耕土。
8			埋甕。
9	2.5YR3/3	暗赤褐色	旧耕土。
10	7.5YR3/6	暗褐色	旧耕土。
11	5YR3/1	黒褐色	旧耕土。1層10層に。
12	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。1層11層に。
13	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。1層12層に。10層に近い。
14	2.5YR3/3	暗赤褐色	旧耕土。
15	10YR3/2	黒褐色	旧耕土。
16	2.5YR3/3	暗赤褐色	旧耕土。1層3の層。
17	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
18	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
19	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
20	5YR3/1	黒褐色	旧耕土。
21	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
22	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
23	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
24	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
25	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
26	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
27	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
28	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
29	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
30	7.5YR3/1	黒褐色	旧耕土。
31	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
32	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
33	10YR3/2	黒褐色	旧耕土。
34	10YR5/1	褐灰色	旧耕土。
35	5YR3/1	黒褐色	旧耕土。
36	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
37	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
38	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
39	10YR4/1	褐灰色	旧耕土。
40	7.5YR3/1	黒褐色	旧耕土。
41	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
42	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
43	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
44	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
45	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
46	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
47	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
48	10YR3/1	黒褐色	旧耕土。
49	7.5YR3/1	黒褐色	旧耕土。

図28　大幡田・城内遺跡トレンチ平面図及び土層断面図

1m、南北0.5m分を検出した。深さは0.7m以上になるようである。

土壙3は東西1.3m、南北1.0m分を検出した。深さは0.5mを測る。

いずれも全容が不明であり、その性格は判然としない。

第2トレンチではトレンチ南西隅近くで、瓦質の大甕を埋め込んだ埋め甕を検出した。その他に溝等があるが、いずれも新しい時期のものである。トレンチの両側で地山を確認するために断ち割りを入れたが、第1トレンチで確認した地山層は認められなかった。

（3）遺物

今回の調査で出土した遺物には、弥生土器・サヌカイト・須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・瓦・陶磁器がある。

弥生土器（図29－1）

第２トレンチの35層より出土。甕の底部と思われる。内外面ともに表面の劣化が著しい。底径は5.3cmを測る。外面は灰白色（5Y8/2）、内面はオリーブ黒色（5Y2/2）を呈し、胎土は粗い。

須恵器（図29－3・4・5）

３は坏蓋や壺の肩部等の破片である。丁寧なナデによって仕上げている。胎土は密で焼成は良好である。第１トレンチ土壙１の出土。

４は大甕の破片と思われる。第２トレンチの表土層からの出土。

５は大甕の破片か。外面はタタキ痕が残る。内面は耕作による劣化が著しい。第２トレンチ35層より出土。

瓦（図29－6・7・8・9）

６は平瓦の破片。第１トレンチ土壙２出土。

７は平瓦の破片。上面に目の細かい布目痕あり。下面は摩耗により不明。第１トレンチ土壙１より出土。

８は平瓦の破片。上面に７より目の粗い布目痕あり。下面にナワタタキ痕が見られる。下面は明緑灰色（7.5GY7/1）を呈し、他の瓦と質感が異なる。第１トレンチ2層出土。

９は丸瓦の破片である。上面は板ナデ。下面に布目が残る。第２トレンチ19層（溝）出土。

瓦質土器（図29－10・11・12・13・14・18）

10・11は鉢。口縁部に櫛描きの波状文を施す。10は第２トレンチ35層、11は第１トレンチ土壙２出土。

12は土管。口径は復元で13.6cm。第１トレンチの西側攪乱穴出土。

13は細かいハケで外面を仕上げている。鉢状に図上復元できるが不明。第２トレンチ32層出土。

14は擂鉢。第2トレンチ35層出土。

18は大甕。第２トレンチ南西隅近くで検出された埋め甕。底径25cmを測る。残存高は19.1cmである。

土師器（図29－16・17）

16・17は羽釜の破片である。16が口径23．1cm、17が口径23.5cmに復元できる。16は第2トレンチ35層出土。17は第1トレンチ西端14層出土である。

陶器（図29－15）

15は擂鉢。第２トレンチ27層出土。

（4）まとめ

第２トレンチで地山層が検出されず、トレンチ底で近世の遺物が出土することから、本調査地では江戸時代に谷を埋めて耕作地を造成したようである。

今回の調査で弥生土器が出土したことで、河合町内における弥生時代の様相に新たな資料が追加された。従来河合町では大輪田・城内遺跡の西側に広がる舟戸・西岡遺跡が弥生時代の遺跡として知られているが、大和川に沿って、弥生時代の遺跡が形成されている可能性が出てきたのではないか。今回出土した土器は近世に造成した土に含まれていたもので南東方向の天満宮社付近が高くなっており、その周辺から土を動かして平坦面の造成を行ったのではないかと考えられる。このことから天満宮付近に弥生時代の遺物跡が存在するのではないだろうか。調査地で弥生時代の遺構が検出されていないので、舟戸・西岡遺跡とのつながりを考察するには至らないが、今後当該遺跡での調査が待たれる。

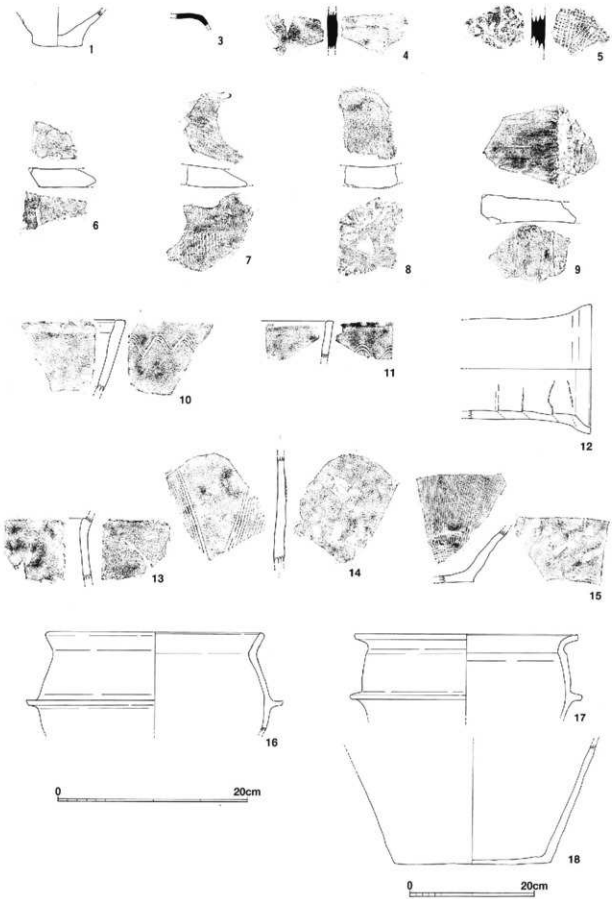


図29　大輪田・域内遺跡出土遺物　(1～17　S=1/4、18　S=1/6)

図　版

1．航空写真
（西から）

2．航空写真
（南から）

1．1号墳航空写真
（垂直）

2．2号墳航空写真
（垂直）

1．1号墳と2号墳(西から)

2．1号墳石室(北から)

1．調査前
（北東から）

2．調査前
（南から）

3．第1トレンチ
掘削状況（北
から）

1．第1トレンチ須恵器出土状況

2．1号墳検出状況（東から）

3．1号墳石室検出状況（トレンチ拡張後・南から）

1．1号墳墓壙掘り下げ状況(南から)

2．1号墳石室内遺物出土状況(南から)

3．1号墳石室内掘り下げ状況(南から)

1．1号墳石室（アゼ除去後・東から）

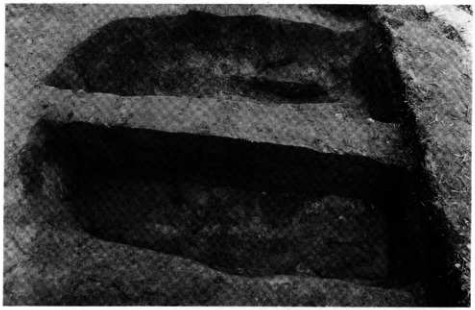
2．1号墳石室（アゼ除去後・北から）

3．1号墳石室（石材除去後・北から）

1．1号墳石室床面断ち割り状況(南から)

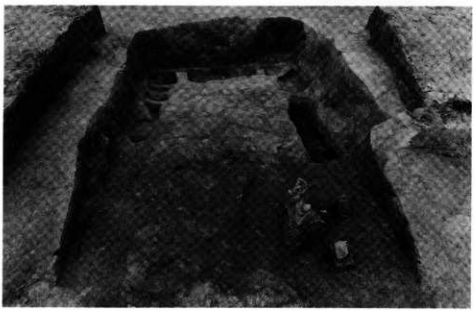
2．2号墳検出状況(北東から)

3．2号墳墓壙・周溝掘り下げ状況(北東から)

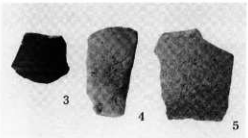


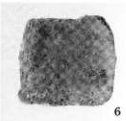
1．2号墳墓壙掘り下げ状況(西から)

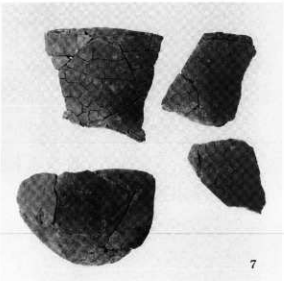
2．2号墳墓壙掘り下げ状況(南から)

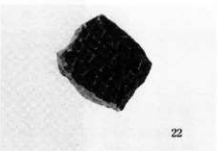


3．2号墳墓壙掘り下げ・須恵器出土状況(拡張後・南から)

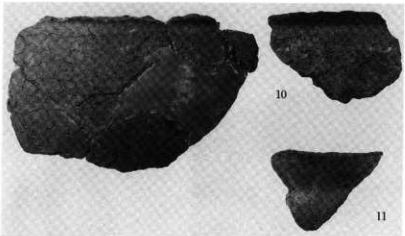


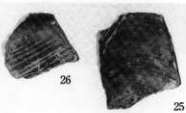


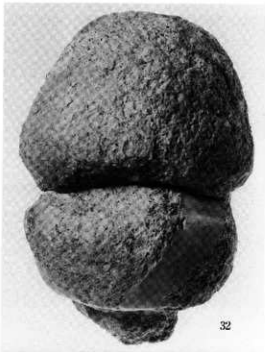


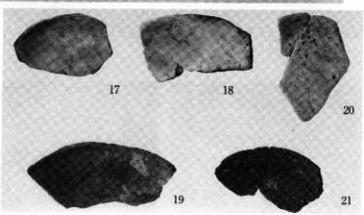


出土遺物1



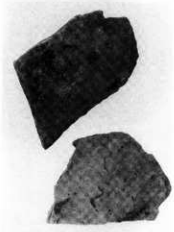






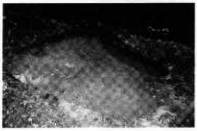
出土遺物２

1．調査地全景（北西から）



2．出土遺物

3．第1トレンチ



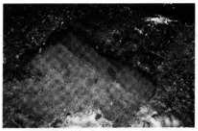
4．第2トレンチ

5．第3トレンチ

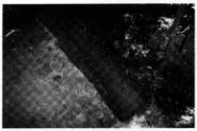
6．第4トレンチ

7．第5トレンチ

8．第6トレンチ



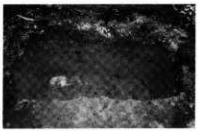
9．第7トレンチ



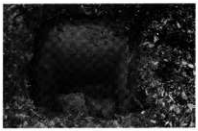
10．第8トレンチ

11．第9トレンチ

12．第10トレンチ



13．第11トレンチ



14．第12トレンチ

1．調査前（東から）

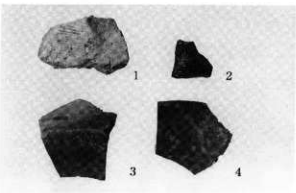
2．第1トレンチ（東から）

3．第2トレンチ遺構検出状況（北から）

4．第2トレンチ掘り下げ状況（北から）

5．第2トレンチ掘立柱（北東から）

6．第2トレンチ遺構完掘状況（北から）

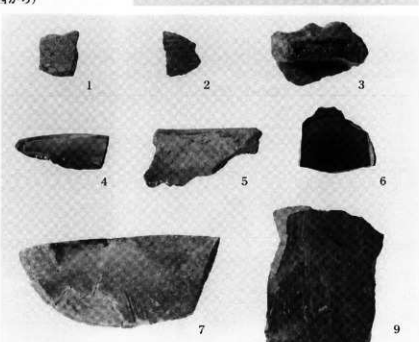


7．出土遺物

1．調査前（北東から）

2．第1トレンチ（西から）

3．第2トレンチ（西から）

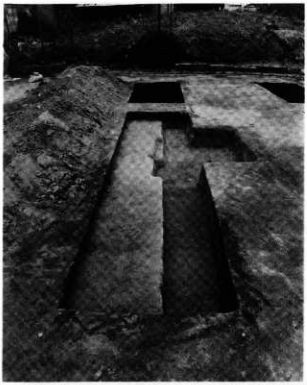


4．出土遺物

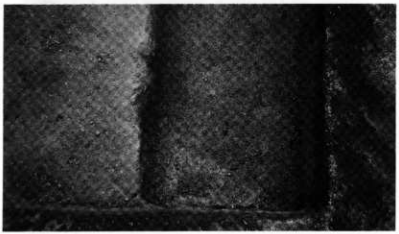
1．調査前
（墳丘から）

2．遺構検出状況
（墳丘から）

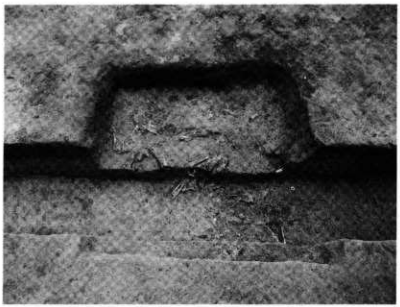
3．遺構掘り下げ
状況（墳丘から）



1．第1トレンチ(南西から)



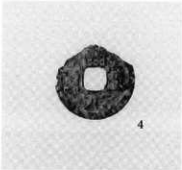
2．第1トレンチ周溝外側輪郭検出状況

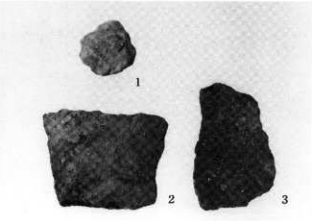


3．第1トレンチ拡張部遺物出土状況(西から)

1．調査地全景（奥が高山4号墳墳丘）

2．第1トレンチ近代の溝と周溝（墳丘から）





3．出土遺物

1．調査前(南東から)

2．第1トレンチ遺構検出状況(東から)

3．第1トレンチ遺構掘り下げ状況(東から)

1．大和川潜水橋と大輪田・城内遺跡（北から）

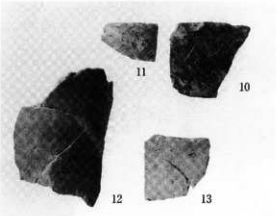
2．第1トレンチ遺構掘り下げ状況(西から)

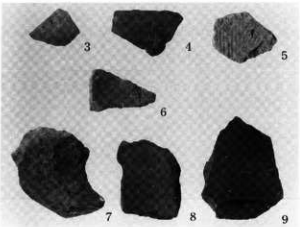
3．第2トレンチ遺構検出状況
（東から）

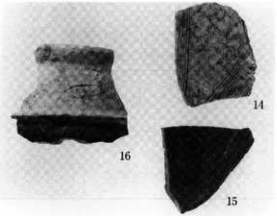
4．第2トレンチ遺構掘り下げ状況
（東から）

1．第2トレンチ埋甕検出状況

2．第2トレンチ埋甕完掘状況







3．出土遺物

ふりがな	にせんご・にせんろく・にせんしちねんどまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書名	2005・2006・2007年度埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	池部三ツ池古墳群　フジ山遺跡　川合大西遺跡　長楽遺跡第５次　高山４号墳（高山塚４号古墳）　大輪田・城内遺跡
巻次	
シリーズ名	河合町文化財調査報告書
シリーズ番号	第20集
編著者名	吉村公男
編集機関	河合町教育委員会
所在地	〒636-0053　奈良県北葛城郡河合町池部２－１３－１　Tel.0745-57-2271　（生涯学習課所在地）
発行年月日	西暦　2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
池部三ツ池古墳群	奈良県北葛城郡河合町池部	29427	047	34 34 51	135 44 10	2006年3月13日～3月29日 2006年6月19日～8月22日	147.00	緊急発掘（個人住宅）
フジ山遺跡	奈良県北葛城郡河合町薬台	29427	009	34 35 21	135 43 45	2006年5月30日～6月5日	39.93	緊急発掘（造成工事に伴う試掘）
川合大西遺跡	奈良県北葛城郡河合町川合	29427	017	34 35 21	135 43 45	2007年1月9日～1月11日	4.79	緊急発掘（個人住宅）
長楽遺跡	奈良県北葛城郡河合町長楽	29427	035	34 34 56	135 44 51	2007年3月6日～3月7日	8.00	緊急発掘（個人住宅）
高山4号墳（高山塚４号古墳）	奈良県北葛城郡河合町西穴闇	29427	026	34 35 13	135 44 17	2007年7月5日～7月10日	10.10	緊急発掘（個人住宅）
大輪田・城内遺跡	奈良県北葛城郡河合町大輪田	29427	004	34 35 25	135 43 26	2007年7月5日～7月18日	32.00	緊急発掘（個人住宅）

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
池部三ツ池古墳群	古墳	古墳時代後期～終末期	横穴式石室　周溝	埴輪　須恵器　土師器 鉄製品　丸　丸勝　石製品	新規に2基の古墳を検出
フジ山遺跡	遺物散布地			石材　土師器	
川合大西遺跡	遺物散布地	近世～近代	掘立柱	埴輪　須恵器　土師器 瓦器	
長楽遺跡	遺物散布地	中世		須恵器　土師器　丸勝　瓦 質土器　陶磁器	第５次調査
高山4号墳（高山塚４号古墳）	古墳	古墳時代中期	周溝	埴輪　銅鈴　馬骨	
大輪田・城内遺跡	遺物散布地 城跡	中世		弥生土器　サヌカイト 須恵器　土師器　丸器 瓦質土器　丸　陶磁器	

2005・2006・2007年度
埋蔵文化財発掘調査報告書
－河合町文化財調査報告書　第20集－

2008年3月31日

編集
発行　河合町教育委員会
奈良県北葛城郡河合町池部2-13-1
TEL　0745-57-2271
FAX　0745-57-1165
URL　http://www.town.kawai.nara.jp/
E-mail　syohgaigakusyu@town.kawai.lg.jp
印刷　株式会社明新社